Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
人間文化研究所

NEWS LETTER

Vol.1, No.3　December 2005

〒467-8501 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１番地　Tel 052－872-3452　Fax 052－872-3536
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp　HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

共同研究プロジェクトの進展

2005 年も残りわずかとなりました。この秋、研究所の共同研究プロジェクトもそれぞれに進展し、３つの研究交流・発表の場が設けられました。共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」では、内外から講師およびパネリストを招き、２つの講演（フォーラム）を開催しました。さらに共同研究プロジェクト「18 才のハロー・ファミリー」では、名古屋市立大学市民公開講座の一環として、市民の方々に向けて研究成果を発表しました。以下に、それぞれの報告を掲載いたします。

越境作家フォーラムのタベ
「いかにして日本語作家となったのか－境界を越える現代日本文学」報告
（主催：共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」・人間文化研究所）

移民文学や亡命文学、クレオール文化など、母語以外の言語による表現者が珍しくはなかった欧米に比べ、日本文学では、在日朝鮮人文学やアイヌ文化、沖縄文化などの複数文化や文学を内包していたとはいえ、境界を越える日本語文学はあまり意識されていなかった。1990 年代にリービ英雄やデビット・ゾペティにより登場した非母語者による日本語文学は、現在アーサー・ビナードや毛丹青らにより、さらに継承され新たな相貌を表している。他方、水村美苗や多和田葉子など、深い外国経験を有し、非母語でも創作する日本人作家たちの日本語文学を加えると、日本語文学における越境性や境界性を具現する役者たちがそろったことになるだろう。

11 月 9 日に開催されたこのフォーラムでは、4 名の作家たちが自らの越境性を自在に語りあった。ビナードは、二つのレンズを通して、社会や人々を見る見方が変容することを指摘した。例えば peace という言葉は、クリスマスカードに書けば単なる挨拶でしかないが、日本語だと中身のある言葉となる。軍部 department of war から国防省 department of defense へのすり替えもその一例である。作家はそうした偽りのレトリックを見抜く shit detector（嘘探知機）となるべきだという。これを受けて、毛は、二つのレンズとはつまり、入り口が一つで出口が二つあることの喩えであるとし、視覚人間である自分の場合、まず漢字が映像として浮上し、目と耳の戦いの中で、それが日本語に変容していくと述懐する。いわば中国語を日本語というハサミで切って、記憶のノリで貼り付けるような作業が日本語の創作活動となる。また言葉そのものの中から出てくるエネルギーを感じて活動しているという。もともと多言語状況の中で生まれ育ったゾペティの場合、まず表現者でありたい、小説を書きたいと言う願望があって、たまたま日本語の世界にいたがゆえに、日本語で書くようになったという偶然性を強調する。多和田は、母語や外国語はいわばレンズないしはメガネのようなものであり、様々の言語と暮らしているとメガネを何重にもかけているような感覚があり、このメガネという生き物とどう付き合っていくのかが、ものを書くことだという。例えば frei（自由な）という言葉が公共性と日常性を同時に持っているドイツ語とは異なり、日本語は生活言語と政治言語が乖離している。さらに、視覚人間から

徐々に聴覚人間に変化していった経緯を踏まえながら、漢字のインスピレーションで書いた『飛魂』と同様に、今度はひらがなやカタカナだけで書いたらどうなるか、日本語の姿を探っていきたいと述べた。その後の質疑に答える形で、言語が装置として働き出す瞬間の想い(毛)や、文字の世界という織物のなかに入り込んでいくプロセス(多和田)、文化の違いよりも共通性に着目するようになってきた経緯(ビナード)、あるいは決まり文句を使わずに、いかにして気持ちを表す独自の表現を見出すかに心をくだく(ゾペティ)といった、それぞれの創作時の心的感覚について興味深い吐露を伺うことができた。

総じて言えば、日本語表現の新たな開拓者として、従来の文学規範を破壊し再構築する方向に向かおうとする多和田と毛の前衛的な立場に対して、ビナードとゾペティは、従来の日本語表現を継承しつつ異化するという建設的、保守的な方向性が明らかとなったように思われる。いずれにせよ、4名の越境日本語作家が一堂に会して、自己の根源的な創作の在り方や越境へのスタンスについて率直に披瀝する場に立ち会うことは、越境文学の現在を考える上で、かけがえのない貴重な機会となった。なお、本フォーラムは出版される予定である。(人間文化研究科教授　土屋勝彦)

講演 「新しい世界秩序におけるヨーロッパ」報告

(主催:共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」 後援:人間文化研究所)

2005年10月12日(水)にドイツ・マインツ大学のチェザーナ教授による「新しい世界秩序におけるヨーロッパ」という講演が行われた。２０名強の参加者によって講演後にも活発な議論も行われた。

チェザーナ教授はスイスのバーゼル大学で教鞭をとっているころから歴史哲学や実存哲学の研究者として知られていたが、1992 年にマインツ大学へ「一般教養講座 Studium generale」の統括監督として赴任して以来、元独外相ゲンシャー、歴代ドイツ連邦大統領ヴァイツゼッカー、ヨハネス・ラウ、レーマン、元ソ連大統領ゴルバチョフなど数多くの政治家・文化人・学者などを講演者として招き、〈人文社会的知〉の社会的意義を広く一般社会に訴えるという活動を行っている。

さて、今回の講演では1992年に成立したヨーロッパ連合(ＥＵ)が21世紀の世界全体にとってどのような意味をもち得るかが哲学的に語られた。ＥＵは、先の世界大戦後にヨーロッパにおける紛争の原因となってきた石炭・鉄鋼資源の共同管理によって平和なヨーロッパを作ることを意図したヨーロッパ石炭共同体(1951 年)に始まり、ＥＥＣやＥＣを経て成立した。経済的な相互依存体制が政治的な平和共存につながるという考えに基づいていたといえよう。しかしＥＵがＥＵ憲法制定という政治的共同体へと深化し、また加盟国25カ国へと拡大する中で、ＥＵという政治的共同体のアイデンティティが問い直されるようになった。それを象徴するのがトルコの加盟問題である。非ヨーロッパ的なイスラム教の国トルコの加盟申請への対応において、そもそも「ヨーロッパ」とは何かが改めて問い直されている。

チェザーナ氏は、「ヨーロッパ」概念に関して古代ギリシャにまで遡る歴史的考察を行うが、それは「ヨーロッパ」を歴史的起源に遡って文化本質主義的に固定化するためではない。全く反対に、ギリシャ・ローマ文化共同体として始まった「ヨーロッパ」は中世においてキリスト教文化共同体となり、更に近代・現代においても常に変容し続けてきた。とりわけ第二次大戦後におけるヨーロッパ統合過程の経験は、加盟各国の国民国家アイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティとの緊張関係と相互変容の経験でもあった。この経験を通して「ヨーロッパ」は、特定の言語や文化や宗教によって定義されるものではなく、むしろ国民国家アイデンティティの〈相互変容の場〉と理解されるようになった。「ヨーロッパ」とはそのような過程的・動的プロジェクトに他ならない。グローバル化が危機としてもまたチャンスとしても捉えられている現代世界において、ＥＵの経験が生み出した相互変容概念としての「ヨーロッパ」概念は他の地域にとっても重要な参照点となりうるであろう。

ところで講演タイトルにある「新しい世界秩序」という表現は、父親ブッシュ大統領が東西の壁が崩壊した直後に発したものであり、息子ブッシュ大統領が「９・１１」テロ以降に進めてきたアメリカの単独主義を目の当たりにする現時点から眺めると、アメリカ的独善と結び付くもの

と受け取られるであろう。しかしながらチェザーナ氏は、「新しい世界秩序」という言葉を冷戦体制という古い世界秩序の後に来る真に多元的な世界秩序として自らに引き受けた元ソ連大統領ゴルバチョフを参照しつつ、この言葉を用いている。「新しい世界秩序」がアメリカ合州国を支配者とする「帝国」へと堕落する危険性が存在する時こそ、この言葉が喚起する希望を救い出す作業が必要である。そしてそのためにこそ、相互承認と相互変容への過程的・動的プロジェクトとしての「ヨーロッパ」概念を今後とも発展させてゆくことが必要である。

（人間文化研究科教授　別所良美）

市民公開講座「18 歳のハロー・ファミリー－人間の育つ環境「家族」のつくり方を考える」報告

＊共同研究プロジェクト「18 歳のハロー・ファミリー」企画

2005 年 12 月 3 日午後、筆者は、市立大学市民公開講座第 4 講座「18 歳のハロー・ファミリー–人間が育つ環境「家族」のつくり方を考える–」で講演をおこなった。

いささか長いこの演題は、今年度市民公開講座の全体テーマ「環境」との兼ね合いのためだが、内容は、人間文化研究所共同研究「18 歳のハロー・ファミリー：次世代育成支援のための若者へのメッセージの研究」（以下ハロファミと略記）の研究成果にもとづき、健康福祉局次世代育成支援室の要請「家族観の育成」にも応えたものである。

当日の聴衆は 20 人程度で、どちらかといえば高齢の男性が多く、ハロファミの本来ねらう層からは少し外れた方々に向けてお話をすることになった。だが、この偏りは予想されたことだったので、若者層と高齢層の両方に向けた内容を用意して対応した。

当日用意したテーマは、少子化、夫婦関係、家族とケアの 3 つで、それぞれについて、昨今の研究動向、たとえば両立型少子化対策をめぐる論争、結婚満足度の男女差、ケアの社会化の国際比較などを紹介しながら、問題のありかと対策を探る、という展開にした。また、聞いてばかりで聴衆が飽きないよう、各テーマの導入として 1 つ 2 つ質問を用意し、周りの人との意見交換などをしてもらってから内容に入る、という趣向も加えた。

なお、内容の選択や整除にあたっては、ハロファミメンバーの全面的な支援をいただいた。さまざまなことに振り回されてなかなか準備の進まなかった筆者が、何とか今回の講師を務めることができたのも、ひとえにメンバー諸賢のおかげである。

講演の出来は、筆者自身には客観的には判断できないので、ここでは措く。ただ、筆者にしては珍しく時間配分がぴったりだったことと、工夫のおかげか、フロアからの意見も途切れずに出たことの 2 点が、うまくいったこととして、個人的には印象に残っている。

もっともフロアの反応は、「少子化対策として行政がお見合いパーティをしてでも結婚を促進すべき」などの「ご意見」が多かったので、研究成果をもとに自分でもシミュレーションをして今後の選択の参考にしてほしい、というわれわれの願いが通じたかどうかは不明だが。

他に特筆すべきこととして、次世代育成支援室から担当参事、室長、主査と 3 人が参加されたほか、何と内密に健康福祉局長が来聴されていたことがあげられる。講演後、室長から局長を突然ご紹介いただいたときには冷汗をかいたが、局長が講演内容についていくつか確認的な質問をされるのを聞き、この官学連携への市の「思い」を感じた。

一方、それに対して、大学側の支援の薄さが逆に際立った感も否めない。たった 1 人の事務方が受付や案内をこなし、教室内に看板もなく、講師も自分で司会を兼ねなければならなかった（しかもそのことは当日に知った）。また、別の研究会がすぐそばの教室で同時に実施され、来聴者が迷っていたのを見て、ハロファミメンバーも「なぜ同じ日に同じ階でやるのか」といぶかっていた。支援が薄いというよりは、大学・学部の行事としての意識の乏しさの現れというべきだろうか。もちろんさまざまな事情があるのだろうが、市との「温度差」について、あるいは学部・研究科の地域貢献・外部連携への姿勢について、考えさせられる経験となった。

法人化を控え、対外的なアピールが、今までより一層大切になっている時期である。その任を果たせたという自信はないが、個人・共同研究の推進はもとより、外部との連携の推進、学内・研究科内の支援体制の整備も含め、今後ともできることを少しずつ、だが着実にやっていきたいと思う。

（人間文化研究科助教授　石川洋明）

リレーエッセイ 人間・地域・共生

第３回「 いつの日か書きたい歴史 」奥田　伸子（人間文化研究科教授）

イギリスに留学して間もなく、私は書店の「伝記」コーナーの広さに驚いた。あらゆる分野の人が自伝を書き、多くの歴史家が、まるでそれが歴史家の存在証明であるように、さまざまな人物の伝記を書いていた。なぜ、伝記の執筆がかくも盛んなのか、私は指導教授にたずねた。彼自身、当時、ライフワークと定めた伝記的研究を執筆していたのだが、彼の答えはこうだった。「歴史は人間が生きてきた結果だから・・・」。だとすれば、無名のある女性が生きてきた人生のなかに歴史を見ることは可能であろう。それならば私にはぜひ書きたい一人の女性がいる。

その女性とはジョイスという名で、私が第 2 次世界大戦下のイギリスにおける女性動員を研究していたときに知り合った女性である。彼女は 1921 年にイギリス中部の工業都市コヴェントリに生まれた。グラマー・スクールの奨学生試験には合格したものの、父親が失業中であり、制服や教科書を買う余裕がないとの理由で進学を断念し、化繊工場で働き始めた。工場の厳しい規則に反発しながらも青春を楽しみ、婚約もした。1940 年空襲のために家を失い、出征中の婚約者の実家に身を寄せた。軍需工場で働き、そこでの仕事を好きになったが、その仕事は戦争中のみであることも知っていた。終戦間近、結婚した。夫はアフリカでドイツ軍と戦ったが、傷一つ負わず帰還した。子どもも二人授かり、幸福な人生が待っているはずであったが、結婚後数年で夫は労災で死亡した。子どもを抱えてジョイスはさまざまな仕事をこなした。再婚し、生活が安定するかに思えたが、二人目の夫もまた事故でなくなった。ジョイスはほぼ一人で二人の子どもを育て上げ、六十歳まで働き続けた。私が出会ったのは退職した直後である。公営プールに通い、海外旅行に行き、友達との交際や孫の成長を楽しみにする、穏やかな生活だった。彼女はもう一度恋をしていた。やがてその男性と一緒に住むようになったが、結婚はしなかった。そのパートナーも 90 年代半ばに亡くなった。彼が第二次大戦中、日本軍に捕虜になったために非常に反日的であることは私もうすうすは気づいていたが、私に何回か会ううちに彼の日本人への見方が変化したことを知ったのは彼が亡くなった後だった。2000 年ごろ、高齢者用の住宅に転居したものの、相変わらず一人で住み続けた。2003 年春、徘徊し、早朝にバス停で保護されたこと、ジョイス自身の認識では 1950 年代に生きていることなどを知らせる家族から手紙が届き、７月中旬に亡くなった。ここには書ききれないことはまだ多い。

ジョイスの子どもたちは、彼女の人生を「不条理と戦った人生」と評した。彼女の人生は、貧困と戦争、個人的不幸に屈することなく前向きに生きた独立心旺盛な人生であり、人を愛することと平和の価値を信じ、身近な人々を大事にすることでそれを示そうとした人生であった。いつの日か、ジョイスを通して、イギリスの労働者階級女性の希望と苦闘、豊かな知性と感性、愛情深さを織り込みながら、彼女が生きたイギリスの二十世紀を描きたいと思っている。

編集後記　先日の大雪には驚きました。たくさんの雪が降ったことにではなく、それがこの地では 58 年ぶりの積雪量だったという事実にです。北陸生まれの私には、どうってこともない雪だったのですが・・・。名古屋ってそんなに雪の少ない地域なのかと、あらためて感じ入りました。厳冬となりそうなこの冬、故郷の豪雪を心配しつつも、名古屋にももっと降ってくれるといいなと期待しているのは、私だけでしょうか。

さて、先日 TV で北海道別海町のドキュメンタリーを見ました。冬の厳しさ、そして漁業の先細りからくる生活の厳しさが淡々と描かれていましたが、そんな中で高校生たちは、自分の希望と家計の現実とを重ね合わせながら、それぞれの進路を自分の意思で選びとっていきます。「親には迷惑をかけたくない」と言う彼・彼女たちからは、最近取り立たされている若者像にはない、自立へ向かおうとする強い力を感じました。

もうひとつ、『ALWAYS』という映画をご覧になりましたか？　題名からは想像しにくいですが、昭和 33 年の東京が舞台の、今話題の日本映画です。青森の中学を出て集団就職で東京に出てくる女の子「六子（むつこ）」（このネーミングにも家庭背景がうかがえますね）が登場人物のひとりなのですが、この女の子もまた、故郷の家族のことを想いながら、東京で自分の場所を築こうと懸命に働きます。ちょうど私の母と同年代の設定だったので、当時の母と「六子」を重ね合わせながら、こんな風だったのかなと想像しながらみていました。いろいろな境遇にある子どもとおとなの悲喜こもごもに、泣いたり笑ったりしているうちに、体はジーンとあたたかく、心はほんわか解放されていきます。ハリウッド映画のような豪華さも、ハッとするほどの伏線の妙もありませんが、ただ単純に、いいなと思える映画です。おすすめですよ。（日本人しか登場しない点が私にはちょっとだけ不満なのですが・・・）（S）

名古屋市立大学
人間文化研究所